

# トゥキュディデスにおける

## ParataxisとHypotaxis

柳 沼 重 剛

Julius Steup が Johannes Classen のトゥキュディデス注解を改訂するにあたって書いた長大な Einleitung は、当然ながらトゥキュディデスの文体についても論じている。彼は言う、トゥキュディデスの文は古いギリシア散文の型である *eiromenē lexis* (これはもちろんアリストテレス『弁論術』3.9., p. 1409a24からの借用、その代表者は、これももちろんヘロドトス<sup>(1)</sup>) と、後の散文作家<sup>(2)</sup>が用いた *katestrammenē lexis* (アリストテレス同書 p. 1409a25) との中間で、叙述部では文と文との結び付きが緊密でなくて並列されており、演説でも主従関係 (Subordination) よりは等位関係 (Koordination) をなしていることが多い云々 (S. LXXVIII)。一方我々がトゥキュディデスの文から感じることに言えば、「緊密でない」どころか正にその逆で、文の要素同士がからみ合っているという印象が強い。Steup は上に引用したのより少し前の箇所 (S. LXXIII) で、トゥキュディデスの難解さは古来誇張されていると言っているが、彼のこの発言は、難解さが誇張されているということを誇張しているように思える。それに第一、トゥキュディデスの文は Subordination よりは Koordination の勝った文だという断言自体人を驚かすに足るものだと私は思う。そこで、以下においては、トゥキュディデスの Subordination と Koordination の用い方の実相を調査して、私なりの結論を出そうと思う。<sup>(3)</sup> ただし、調査は次の2点に限ることとする。(1) トウキュディデスにおける挿入文、およびそれとの関わりにおける小辞 *γάρα* の用法について、(2) Blass のいわゆる 'aufsteigend' な Periode と 'absteigend' な Periode について。

I トッキュディデスにおける挿入文と *ráp*

§ 1 Steup は言う、理由を示す、あるいは説明を与えるための従属節の代りに、トッキュディデスは夥しい数の括弧でくるんだ挿入節を文と文の間に押し込んで、*ráp*（「というのは」）と言う、と。それはこういうことを指している。例えば i 32.2 で、「(1)コリントスが軍備を整えつつあることを知ったケルキュラは恐れた。そして、これまでギリシアのいずれの国とも同盟関係になく、…であったがゆえに、(2)ここは一つアテナイを訪れて同盟関係に入り、…するのがよいと彼らは考えた」と書くべきところを、トッキュデスは下線部を括弧でくるんで、並列された二つの文(1)と(2)の間に挿入し、「それというのも、彼らはいずれの国とも同盟関係になく、また…だからなのだが」とやり、都合三つの文を平面的に並べるといっているのである。

もともと *ráp* という小辞の語源がどうであったにせよ、それがホメロスに用いられた時にはすでに、「というのは…だからなので」と理由を述べる、あるいは、「それはつまり…ということで」と説明を加えるために用いられるようになっていたことは間違いなく、これに比較的近いものと言えば英語の *for* であろう。そこでこの語の通常の使い方では、二つの文をつなぐ等位接続詞として、例えば「夜明けが近くに違いない、*ráp* もう鳥が鳴き始めたから」となり、*ráp* の導く節は結論を表す節の後に置かれる。そして後に置かれるということは、*ráp* 節にはつねに「付け足し」的気分がつきまわっているということで、これは非常に大事なことである。

しかしこれだけならば挿入文の問題は起り得ないが、例えば「(1)夜明けが近くに違いないから、(2)そろそろ起きねばなるまい」という文がまず頭に浮かんで、しかし辺りはまだ暗いのに、なぜ「夜明けが近くに違いない」と思うのかというと、(3)「それは鳥が鳴き始めたから」なのだとして理由づけて、それを一まとまりの文にしようとする挿入文の問題が起る。「夜明けが近くに違いない（というのは、もう鳥が鳴き始めたからなのだが）、そろそろ起きねばなるまい」となる。ここでも括弧内の文は付け足し風に響くが、それは括弧のせいではなく *ráp* を使ったせいである。括弧を使うか使わないかは前後の文が決めてくれるだろう。つまり、その部分を括弧でくるまない限り文法

的、文体論的に見て、前後とのつながりが非常に悪くなる場合には、括弧を使わざるを得ないであろう。<sup>(4)</sup> ところでこの文を(1)(3)(2)の順に置いて、「もう鳥が鳴き始めたところを見ると夜明けも近いに違いないから、そろそろ起きねばなるまい」と書けばこれは複文、すなわち従属節を伴った文、hypotaxis になり、また模範的な periodos、少なくともアリストテレスが「気持がよい」と言った種類の periodos (『弁論術』3.9., p. 1409b1) になる。(3)は(1)の根拠を言い、(1)は(2)の理由を述べ、そして(2)でびたりと文を納める(ただしこの際、「鳥が鳴き始めたところを見ると」という節に γάρ は使えず、ἐπεὶ とか ὥς とかいう適当な接続詞を使って従属節とするか、あるいは絶対的属格を使うことになるだろう)。これに対して上に述べたような挿入文の形を採れば、これほど整然とした文はにならなくなる。はじめに引用した Steup の考えだと、文というものは究極的には整然としたものになるべきだと前提されているように思えるが、整然とした文を書くか敢えて整然としない文を選ぶかは、筆者が何をどう書こうと志すかによってその都度決まるのであって、散文技術の発達・未発達ということだけから説明し切れるものではないと思う。

§2 少しづつ知識を整理しよう。まず現在の印刷されたトウキュディデスのテキストには括弧付きの挿入文がどれぐらいあるかを見よう。参考のためにヘドロトス、それから少し時代は下るがデモステネス『冠について』についても数字を挙げておく。テキストは OCT 版

表1

		総行数	挿入文数	γάρを含むもの	その比率
トウキュディデス	叙 述	13,828	221( 63)	173	78.3%
	演 説	3,789	45( 84)	37	82.2
ヘ ロ ド ト ス	叙 述	18,977	117(162)	93	79.5
	引 用	3,000	6(500)	6	100.0
デ モ ス テ ネ ス		2,232	24( 93)	18	75.0

( ) 内は平均何行に1回現れるかを示す<sup>(5)</sup>

である。ここから分ることは、

(1) なるほどトゥキュディデスには括弧付き挿入文が多い。ヘロドトスのほとんど3倍近い数になっている。

(2) 演説中では叙述部に比べ頻度が低く、ことにヘロドトスでは、直接話法による引用文中ではわずか6個しかないことを見ると、やはり括弧付き挿入文などというものは、書かれた文(従って読まれる文)においてこそ自然でも、語られる文(従って聞かれる文)ではごたついた印象を与えるからよくないのだ、そして、トゥキュディデスの場合、叙述と演説での差がこの程度ですんでいるのは、彼の演説というのが、実際に行われた通りを写したのではなく、こういうことが言われたに違いないと彼が信じたことを彼自身の言葉で述べたものだからだろう、などと了解されよう。——しかしそれならデモステネスはどうだということになる。

(3) 挿入文が *γάρα* を含んでいる比率が、ほぼ70~80%で一定しているということは、挿入文を入れる目的がほとんど *γάρα* を使って理由を説明することにあつたことを示している<sup>(6)</sup>。ただし、これだけ見ると *γάρα* の主要用途が括弧付き挿入文中に使うことにあつたかのように見えるので、もう一つの表を掲げる。

表2

		総 行 数	<i>γάρα</i> 総 数	挿入文中 の <i>γάρα</i>	その比率
トゥキュディデス	叙 述	13,828	671(21)	173	25.8
	演 説	3,789	359(11)	37	10.3
ヘロドトス	叙 述	18,977	1,169(16)	93	8.0
	引 用	3,000	310(10)	6	1.9
デモステネス		2,232	155(15)	18	11.6

( ) 内は平均何行に1回現れるかを示す

すると、(1) *γάρα* という小辞だけならトゥキュディデスよりはヘロドトスの方がかなり多く使っていること、

(2) 叙述よりは演説あるいは直接話法による引用の方が頻度がかんり高いこと、従って *γάρα* そのものが談話調の文に向いているらしいこ

との,

(3) 挿入文中に使われた *ráp* は、*ráp* 全体の用例の中でごく一部にすぎないこと、従って、「というのは…だから」と言う時、ほとんどの場合は括弧付きの挿入文にしないですんでいるということ、などが分る。こうして見ると、トウキュディデスが他の作家に比べれば *ráp* 入りの挿入文を多く用いたという Steup の認識そのものは正しい。だが、そのトウキュディデスにおいてさえ、*ráp* は括弧付き挿入文中に用いない方が普通だったという事実を念頭に置きながら、その事実認識についての彼の解釈（トウキュディデスは *hypotaxis* で言うべきところを *parataxis* で言い表した、という）も正しいかどうかを見ることにしようと思う。

§ 3 Steup はこれらの *ráp* の中でもとくに、「*ráp* によって説明をする方の節が説明される節よりも前に置かれている場合」に注目する (Steup, *op. cit.*, S. LXX IX)。これは Denniston の言う「先行の *ráp*」 (Anticipatory *ráp*: Denniston, *op. cit.*, 68f.) のことで、つまり上にも述べたように、*ráp* 節は結論部の後に置かれるのが普通なのに、それが前に出て、こうなると *ráp* 節は理由を表す副詞節のような使われ方をすることになるが、これは *ráp* に無理強いをすることである、と言いたいのだろう。そこで、そういう先行の *ráp* というのがどれぐらいあるのかをまた表にしてみると、

表 3

		総行数	<i>ráp</i> 総数	先行の <i>ráp</i>	その比率
トウキュディデス	叙 述	13, 828	671	35( 395)	5.2%
	演 説	3, 789	359	3(1, 268)	0.8
ヘロドトス	叙 述	18, 977	1, 169	98( 193)	8.4
	引 用	3, 000	310	31( 96)	10.0

( ) 内は平均何行に 1 回現れるかを示す<sup>(8)</sup>

これによるとトウキュディデスが使っている先行の *ráp* の頻度はヘロドトスの 3 分の 1 強にすぎず、また、彼らが使った *ráp* 全体の中で先

行の *γάρ* が占める率から言っても、トゥキュディデスはヘロドトスの4割強でしかない。この点では、先行の *γάρ* に関してまず注目すべきはトゥキュディデスよりはヘロドトスの方である。

ただし先行の *γάρ* はヘロドトスの発明ではない。すでにホメロス（主として『オデュッセイア』）にある。悲劇にもある。喜劇にもある。ホメロス全体、悲劇全体でもそれぞれ辛うじて2桁になる程度だが、とにかくある。従って、我々から見れば非常に特殊なものに見えるこの *γάρ* 用法は、実はギリシア文学史の発端においてすでにあつた、ただそれをはじめて大規模に使ったのがヘロドトスであり、トゥキュディデスは、ヘロドトスを除く彼以前の作家に比べれば多い方だということになる。——実状を見よう。

§ 4 ホメロス『イリアス』xxiv 223で、プリアモスがヘカベに向かって、息子ヘクトルの遺骸を引き取るべく敵将アキレウスの陣へ参るぞと、無謀とも思えることを言う、

*νῦν δ', αὐτὸς γὰρ ἄκουσα θεοῦ καὶ ἐσέδρακον ἄντην, εἶμι.*

「わしは参るぞ、この耳で神の御声を聞き、この目で御姿を拝したのだからな」と言うのとか、アイスキュロス『アガメムノン』1069で、捕虜としてトロヤから連れて来られた姫カッサンドラが無気味に無言をつづけているのについて、コロスの長が、

*ἐγὼ δ', ἐποικτίρω γάρ, οὐ θυμώσομαι.*

「わしは腹を立てたりはせぬ、不憫に思うゆえな」と言うのとかは、いずれも下線部が *γάρ* 節で、それぞれ *εἶμι* と *οὐ θυμώσομαι* にかかっている。「先行の *γάρ*」をなす。そしていずれもこの *γάρ* 節を後回しにして、*νῦν δ' εἶμι, αὐτὸς γὰρ*… あるいは、*ἐγὼ δ' οὐ θυμώσομαι, ἐποικτίρω γάρ* とすることはできる。できるのにそらしないで先行の *γάρ* という特殊な語法を用いた、考えられる唯一の理由は韻律のためということだろう<sup>(9)</sup>。

そこで、韻律が問題にならない散文の例を見よう。すぐに思い出されるのはヘロドトス第1巻8.2の有名な条——リュディア王カンダウレスが、自分の妃を溺愛するあまり、我が妃こそ世界一の美女なりと信じ、自分で信じるだけでは気がすまなくなって他人にも信じさせたくなり、近習のギュゲスに向かって「我が妃の裸身を見よ」と狂おしい

命令を下すところである。

*Γύγη, οὐ γάρ σε δοκέω πείθεσθαι μοι λέγοντι περὶ τοῦ εἶδος τῆς γυναι-  
κός…*<sup>(10)</sup> *πολεῖ ὅπως ἐκείνην θεήσεται γύμνην.*

この文では、「妃の容姿について余がいかに口で説明してもそちは信じてはくれんようであるによって」という *γάρ* 節が先にある、「妃が裸になったところを見るようにいたせ」と命じている。理由を述べる節が主節に先立つのは一向に構わないが、ここではそれが *γάρ* 節である点に問題がある。

しかし *γάρ* 節において何より大事なことは、§ 1 で述べたように、*γάρ* にはつねに付け足しの気分がつきまわっているということである。だからこそ *γάρ* 節はほとんどの場合主節の後に置かれると同時に、主節の前に来ようが後に来ようが、この付け足しの気分には変りがないとも言える。つまり、*ἐπεὶ* …とすべきところを *γάρ* 節で代用するわけではないのである。例えば今のカンダウレスの言葉だが、これを日本語に訳す場合、この *γάρ* 節の付け足しの気分を訳の上でも出そうと思ったら、「我が妃が衣服をば脱いだところを見よ、何せそちは余がいかに言葉をつくしてあれの容姿を言うて聞かせても信じてはくれんよだからな」と、*γάρ* 節を後から訳すか、あるいは原文の語順に従って *γάρ* 節を先にするなら、「そちは…信じてくれぬよだから言うておくが」というように下線部のような言葉を補う必要がある。そして、今は訳すことに即して言ったが、訳ではなく、忠実に意味を辿ろうとするなら、後者のようにとる他なく、つまりこういう言葉の補いがどうしても必要だということであって、これが *ἐπεὶ* などを使った完全な副詞節との決定的な違いだということができる。こうして、*γάρ* 節を主節の後に置けば付け足し分になり、前（あるいは主節の中、ただし始め近く）に置けば、括弧の有る無しにかかわらず挿入文になるわけで、かくて § 1 の終りで言ったことにまた考えが戻る。

そう考えてヘロドトスの先行の *γάρ* をもう一度見渡してみると、今言ったような言葉の補いを予想して挿入文になっている例が33あることを知る（そのうち22例は *(καὶ) οὐ γάρ* という句で始まっているが、なぜようなのは私には分らない）。ただしこれは、ヘロドトスが使った先行の *γάρ* の総数の4分の1でしかない。残り4分の3、という

と大半だが、は、こういう言葉の補いも必要とせず、ホメロスや悲劇でのように(註(9)参照) 命令文・疑問文でもなく、要するになぜ先行の  $\gamma\acute{\alpha}\rho$  になっているのか理由の判然としないものであるが、その中のかなり多くでは、主節の方に  $\gamma\acute{\alpha}\rho$  節を受ける小辞(例えば  $\acute{\omega}\nu$  (=  $\acute{\omega}\nu$ ), あるいは場合によっては  $\gamma\acute{\alpha}\rho$  節全体を受ける指示代名詞があって、この小辞や指示代名詞がクッションとなって  $\gamma\acute{\alpha}\rho$  節と主節の間に入り、その結果  $\gamma\acute{\alpha}\rho$  節の付け足しの気分が薄らいで主節につながる、つまり本物の副詞節のような働きをするようになっている、そういう  $\gamma\acute{\alpha}\rho$  節の合計は27例、内、小辞によるもの16例(どういうわけかそのうち10例までが直接話法による引用からのもの)、指示代名詞によるもの11例(どういうわけかそのうち10例までが叙述部からのもの)である。先の33例と合わせると計60例となり、これでヘロドトスが用いた先行の  $\gamma\acute{\alpha}\rho$  のようやく半分となった。これ以外に関してはなぜ  $\gamma\acute{\alpha}\rho$  節が先行するのか、適切な説明の方法を今のところ見出しかねている。

§ 5 トッキュディデスの先行の  $\gamma\acute{\alpha}\rho$  の状況はこのヘロドトスの場合とは全く違ってかなりはっきり限定されている。まずヘロドトスでは先行の  $\gamma\acute{\alpha}\rho$  129個中括弧付き挿入文に使われているのはただの7個にすぎないが、トッキュディデスでは先行の  $\gamma\acute{\alpha}\rho$  38個中35個、つまりほとんど(数字を挙げれば9割以上)が括弧付き挿入文の中にある。ということは、トッキュディデスでは先行の  $\gamma\acute{\alpha}\rho$  はほとんど挿入文的性格を帯びているということである。それを裏づけるように、この先行の  $\gamma\acute{\alpha}\rho$  の約半ばは ' $\eta\sigma\alpha\nu \gamma\acute{\alpha}\rho$ ...' (および  $\eta\nu \gamma\acute{\alpha}\rho$  などその類似句) で始まって、主節が言い表していること背景や下地の説明をしているか(全部で9例: i 31.2, 51.5, 115.4, iii 3.1, 52.3, v 39.2, vii 4.2, 50.4, viii 43.2), あるいは ' $\acute{\epsilon}\tau\upsilon\chi\omicron\nu \gamma\acute{\alpha}\rho$ ...' (およびその類似句) で始まって付帯的狀況を説明しているか(全部で9例: i 72.1, 135.3, ii 31.1, iv 130.3, 132.2, v 21.1, 36.1, vii 4.3, viii 98.1) であり、挿入される場所としては主語の直後、あるいは実質的に直後というのが、これまた全体の半ばで20例ある。——つまりこういうことになる、先にも (§ 1) 述べたように、 $\gamma\acute{\alpha}\rho$  それ自体に付け足しの性格があって、従って  $\gamma\acute{\alpha}\rho$  の圧倒的大多数は主節の後に置かれるが、文章構成上何らかの理由で後に置くことができない、あるいはむずかしい場

合、トウキュディデスはこれを挿入文として先立たせた。例えば i 115.4を見よう。この文は τῶν δὲ Σαμίων ἦσαν γὰρ τινες…と始まっていて、一見これ以前の文を受けているようにみえるがそうではない。——サモスとミレトスの間に戦いが始まった。プリエネの領有をめぐることである。ミレトス人は戦に負けるとアテナイへ行ってサモス人の誹謗をした。ところがその時サモス人で政変をたくらんでいた連中がミレトス人の応援をした。そこでアテナイ人は軍艦40隻を以てサモスへ赴き、サモスに民主政体を樹立して、50人の少年と50人の成年男子を人質としてレムノスへ拉致して引き揚げた、とつづく。ここでは γὰρ よりは δὲ が前文とのつながりを確保しているの、γὰρ はどうしても後続の文にしかかからない。従ってこれが先行の γὰρ であることは疑いようがない。そして文はこうつづく——

τῶν δὲ Σαμίων ἦσαν γὰρ τινες οἱ οὐκ ὑπέμεινον, ἀλλ' ἔφυγον εἰς τὴν ἡπειρον, ξυθόμενοι τῶν ἐν τῇ πόλει τοῖς δυνατωτάτοις Πισσοῦθνῃ τῷ Ὑστάσπου ξυμμαχίαν, ὃς εἶχε Σάρδεις τότε, ἐπικούρους τε συλλέξαντες εἰς ἑπτακοσίους διέβησαν ὑπὸ νύκτα εἰς τὴν Σάμον.

この文は γὰρ がなくてもこの節と後続の節とのつながりには支障が生じないから、γὰρ は副詞的で、何なら省いてしまってもよい。省くと、「サモス人のうち国内に留まらずに大陸へ逃亡した者らは…し、…し、そして…した」という、ただそれだけの文になる。しかし γὰρ を入れると、「サモス人のうちには国内に留まらずに大陸へ逃亡した者が若干いたのだが、この者らは…し、…して、夜陰に乗じてサモスへと渡った」となって、γὰρ 節はやはり挿入文の効果を發揮する。しかしだからと言って、この構文では γὰρ 節を後回しにできる余地はない。(11)

Γὰρ 節を後へ置くことができない典型的な例をもう一つ挙げるとすればそれは iv 132.2で、

καὶ (ἐτύγχανε γὰρ τότε Ἰσχαγόρας ὁ Λακεδαιμόνιος στρατιῶν μέλλων περὶ πορεύσειν ὡς Βρασίδαν) ὁ [δὲ] Περδικκας, ἅμα μὲν κελεύοντος τοῦ Νικίου, ἐπειδὴ… εὐδηλὸν τι ποιεῖν… ἅμα δ' αὐτὸς οὐκέτι βουλόμενος… ἀφικνεῖσθαι, παρασκευάσας… Χρώμενος…, διεκώλυσε τὸ στρατεύμα… ὥστε….

この文が言わんとしているのは、要するに「(スパルタの将ブラシダ

スに憎しみを抱いていた) ペルディッカスが、(ブランダスのもとへ届けられるはずの) 軍勢の通行を妨げた」ということなのだが、まずスパルタ人イスコボラスがブランダスのもとへ軍勢を陸路徒歩で送り届けようとしていた、という付帯的狀況を *γάρ* 節で示し、「そういう状況にあったのであるが」と後の主節につなぐ。ところが主節の主語ペルディッカスと「妨げた」という述語動詞の間に、*ἀμα μὲν…ἀμα δὲ…* で整理されてはいるものの、延々と分詞構文が挿入されていて、これでは *γάρ* 節を後回しにしようがない。もし *γάρ* 節を *ὁ Περδικκας* の前に置くことを潔しとしないのなら、*γάρ* を使わない文にする他なく、考えられるのは絶対的属格ぐらいのものだろう。しかしそうしないで敢えて *γάρ* 節を使ったのは、ヘロドトスがあれだけ広く *γάρ* 節を使って、その下地を作っておいてくれたおかげであろう。

これとは別に、*γάρ* 節を後に置くことができないわけでもない、困難でもない、つまり明らかに後に置くことができるのに、そうしないで挿入文にした例がトゥキュディデスにもあるようで、例えば iii 52.3 でプラタイア人がペロポネソスの軍使にひどくあっけなく都市の明け渡しを決めてしまったいきさつを述べる条で、*οἱ (sc. Πλαταιῆς) δὲ (ἦσαν γὰρ ἤδη ἐν τῇ ἀσθενεστάτῳ) παρέδωσαν τὴν πόλιν* などというのとか、viii 61.3 で *οἱ ξύμμαχοι (ἤδη γὰρ καὶ ὄψε ἦν) ἀνεχώρησαν ἐς τὴν πόλιν* とかいうのがそれで(そして恐らく v 41.3)、これらの箇所では *γάρ* 節を文末に置くこともできるが、そうしないで文頭近くを持って行った方がいっそう付け足し的、挿入文的気分が強まり、さながら主節の中に溶け込んでとまでは言わないが、主節の中に取り込まれる。つまり *γάρ* 節の意味の重みをいっそう軽くするという効果を挙げている。

かくてトゥキュディデスの先行の *γάρ* はほとんど挿入文として使われているのだが、それは *γάρ* の通常の用法には従いにくい がやはり *γάρ* を使いたい場合と、通常の用法に従うこともできるが敢えてそれを採らない場合とがあることを知る。つまり Steup の言うように、hypotaxis にすべきところを parataxis で書くために *γάρ* 挿入文を使ったというよりは、挿入文にしたいから *γάρ* を使ったのである。従属節で言える内容を分詞構文や絶対的属格で言えば、その部分の文中での重みは軽くなる。*Γάρ* 挿入節の重さも恐らくそれと同程度だろう

と私は推測するが、分詞構文にはなくて挿入節にはある性格と言ったら、§ 1 の終りで述べたような付け足し、ついで、というような感じ、あるいは「そう言えばこれは…だったのだが」とか、「これは実は…ということだ」と注を付ける効果であろう。

## II Parataxis と Hypotaxis

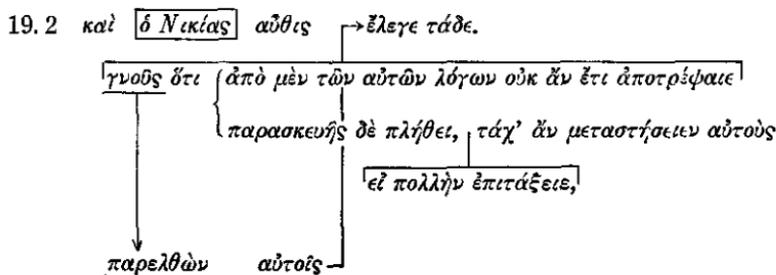
§ 1 Blass がペリオドスには 'aufsteigend' なものと 'absteigend' なものと 2 種類あるが、ギリシア人の通念に従えば前者のみが本当のペリオドスである、然るにトクキュディデスのペリオドスは多々が 'absteigend' であって、これは実質的には Parataxis に等しい、と言う (*Die-attische Beredsamkeit*, I, S. 224) のを聞いて、たいていの読者はトクキュディデスのあの文が Parataxis などとはおかしいと大声をあげたくなっただけである、Parataxis ならもっと読み易いはずだと。Blass が 'das aufsteigende Periode' と呼んだのは、従属節が先にあり、それがいくつか重ねられた後に、最後に主節が来てびたりと言い納める文のことであり、'absteigend' というのはその反対で、主節の後に従属節がつづくものである。「上りのペリオドス」「下りのペリオドス」とはうまい言い方をしたものだと思う。そしてその「下りのペリオドス」が実質的には Parataxis に等しいという点については私は疑念を抱いている。<sup>(12)</sup> 以下に述べることはそれを中心にしたいくつかのことである。

まずはじめに、ギリシア人の通念では「上りのペリオドス」のみが本当のペリオドスだったという点はそのまま認めてもよい。しかし、この「ギリシア人」というのが問題で、これは「アリストテレスやデメトリオスのような弁論術研究者」という意味でなら正しい。しかしすべてのギリシアの散文作家とまで言わずとも、弁論術研究者ではなくて実際の弁論家にとってもそうであったか、という辺りから問題が出て来る。とくに Blass のように「下りのペリオドス」は実質的には Parataxis だとまで言われると、これはどうしても、ギリシア人にとっては「上りのペリオドス」の方が理想だったと思えて (アリストテレス『弁論術』前掲箇所などは明らかにそう読める)、それが理想だったら、すべての散文作家はそれを目標とし、自分の書く文章がな

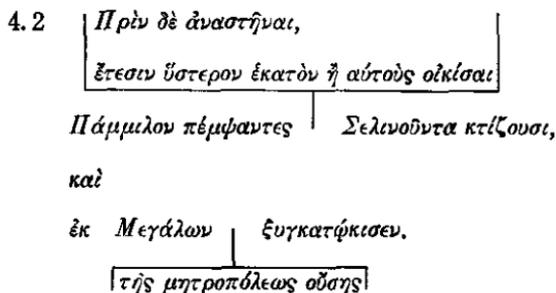
るべくそれに近づくように努力したはずだと思える。ということは必ずしもそうではないのではないかと私は予想しているということで、以下はその予想の当否を確かめる手続きである。

§ 2 Blass の言う「上りのペリオドス」を  $H_1$ , 「下りのペリオドス」を  $H_2$  という記号で表すことにする。しかしすべての文がこのいずれかに属するわけではなく、一つの文がこれらの混合である場合が多く、とくにトッキュディデスやデモステネスのような息の長い文を書く人の場合そうである。このほか、一つの文が一つの colon である場合は  $O$  という記号で表す。また parataxis は  $P$  で表す、と決めておく。そしてトッキュディデス、ヘロドトス、弁論家のアンティポソ、アンドキデス、リュシ阿斯、それに、時代は下るが名弁論家という点でデモステネスの文をそれぞれ150から200ぐらい<sup>(13)</sup> 取り上げて、その一つ一つが上に示した  $O, P, H_1, H_2, H_3$  のうちどれに属するかを調べてみる。トッキュディデスは第六巻のはじめから51.2まで、これで叙述部の文を205個見ることになる。ただしここまでは演説は142文しか見ないことになるので、それに76—85を加える。そうすると演説は199文見たことになる。ヘロドトスは第一巻のはじめから32.1まで、これで210文。アンティポソは『テトラロギア』1で150文、アンドキデスは『秘儀について』1—55で180文、リュシ阿斯は『エラトステネス駁』1—75の最初の文まででやはり180文、デモステネスは『冠について』1—76で210文である。Colon と colon が等位関係で結ばれていれば  $P$  というのは問題ないとして、colon ではなく複文の形をしたもの<sup>(14)</sup> が二つ、あるいはそれ以上が等位関係で連ねられていることがある。その場合、そのそれぞれが  $H_1$  でも全体は  $P$  とする。一方が  $H_1$ , もう一方が  $H_2$  であるものが等位関係で結ばれている場合は（迷いも生じるが） $H_3$  とする。またもちろん、従属節→従属節→主節ならば  $H_1$  だが、その後にもた一つ二つ従属節がつづいている場合も  $H_3$  とする。このほか、従属文の中に別の従属文が含まれていたり、さらに分詞構文や絶対的属格や、対格+不定法の節や、その対格に関係節が付随しているのや、実にいろいろの場合があるが、それでもとにかく主節を目指して一直線に進んでいけば  $H_1$ , 主節の後にそういうものがぞろぞろつづいていけば  $H_2$ , そういう様々な要素が並んでいる中間に主

節が来ていれば H<sub>3</sub> というように決めておく。実例を挙げてみよう。  
 全部トゥキユディデスの第六巻からの文である。



この文は主節の主語と述語の間に一つに分詞構文とそれに従属する *ὅτι* 節 2 個, その 2 番目の *ὅτι* 節にさらに従属する節, それら全部を受ける分詞構文 *παρελθῶν*…と, 都合 4 個の従属的要素が挿入されているが, 先程の *γάρ* の時もそう見たしたように, 挿入節は一種の先行であり, 従ってこの文は H<sub>1</sub>, 現に *ἔλεγε τάδε* とびたりと納まっている。



この文は二つの文 (ともに H<sub>1</sub>) を *καὶ* で並列的に結んだもの, P である。ただし, 後にも触れるように, こういう場合 P でよいかそれとも H<sub>1</sub> とした方がよいかしばしば迷うものである。

- 2.5
- $\left\{ \begin{array}{l} \text{ἔλθόντες δὲ εἰς τὴν Σικελίαν στρατὸς πολλὸς} \\ \text{τούς τε Σικανοὺς κρατοῦντες μάχῃ} \end{array} \right.$
- ① ἀνέστειλαν πρὸς τὰ μεσημβρινὰ καὶ ἐσπέρια αὐτῆς
- καὶ
- ② ἀντὶ Σικανίας Σικελίαν τῆν νῆσον ἐποίησαν καλεῖσθαι
- καὶ
- ③ τὰ κράτιστα τῆς γῆς ᾤκησαν
- $\left\{ \begin{array}{l} \text{ἔχοντες, ἐπεὶ διέβησαν,} \\ \text{ἔτη ἑγγὺς τριακόσια} \\ \text{πρὶν Ἑλλήνας εἰς Σικελίαν ἔλθειν.} \end{array} \right.$

この文は三つの文が二つの *καὶ* で結ばれていて、これも建前上 P である。しかしはじめの文は  $H_1$  の形を持ち、2 番目の文は O であり、3 番目の文は主節の後に分詞構文、不定法句を含む副詞句とつづくから  $H_2$  で、結局  $H_1 + O + H_2$  の形を持つ、従って、全体は  $H_3$  である。

このような分類には異論もあろう。私自身例えば上記 vi 4.2. について、これを P とすべきかどうか迷わないわけではないが、アリストテレスが  $H_1$  について言った「このような文は気持がよい」というのを思い出して、これはそれほど気持がよいとは言えないから P の方を探ることにした。このほか私自身が今でも截然たる気持になれずにいるものが二つあって、その一は *μέν…δὲ…* の構文。これは明らかに P に属するが、*μέν…* と *δὲ…* が鮮やかに対照的である場合に限り  $H_1$  とした。「びたりと納まる」からである。もちろんただ *μέν…δὲ…* の構文だというだけなら P とした。ことに *μέν* が一つの *δέ* だけでなく、二もつ三つも *δέ* を伴うことがあって、それは問題なく P である。その二は、ヘロドトスに多い対格 + 不定法構文である。彼の文の癖で、一度ある文で対格 + 不定法を使うと、文としてはそれとは独立した後続の文の主語を対格に、動詞を不定法にする、しかもそういう文をいくつもつづける、そういう場合は、その対格を主語、不定法を主動詞と見なした。

§ 3 このようにして、上記作家の上記の箇所がどういう種類の文で構成されているかを表にすると次のようになる。

表 4

	O	P	H <sub>1</sub>	H <sub>2</sub>	H <sub>3</sub>	計
ヘロドトス	36 (17)	54 (26)	43 (21)	49 (23)	28 (13)	210
トウキュディデス	32 (15)	31 (15)	52 (26)	59 (29)	31 (15)	205
	15 (7)	28 (14)	37 (19)	87 (44)	32 (16)	199
アンティボン	31 (20)	21 (14)	53 (35)	30 (20)	17 (11)	152
アンドキデス	44 (24)	37 (21)	24 (13)	48 (27)	27 (15)	180
リュシアス	23 (13)	33 (18)	28 (16)	72 (29)	24 (13)	180
デモステネス	52 (25)	38 (18)	38 (18)	60 (29)	22 (10)	210
計	233	242	275	405	181	1336

( ) はそれぞれの比率を示す

こうして見ると、どういふ種類の文を使うかは作家ごとに異なっていて、あまり共通点はない。しかしその中であって目立つことが四つある。その第一は、4人の作家が H<sub>2</sub> を最も多く用いていること。逆に H<sub>3</sub> という複雑な構成の文は各作家とも用いること最も少なかったということ。第二に、ヘロドトスは他に比べてPがかなり多いということ。第三にアンティボンが目立って H<sub>1</sub> を多く使っているのと、ヘロドトスとトウキュディデスも、アンティボンほどではないにしても比較的 H<sub>1</sub> を多く使っていること。第四に、Blassはトウキュディデスのペリオドスは実質的には parataxis に等しいと言うが、それならこの表のトウキュディデスの H<sub>2</sub> と P との数値の差は何を意味するのか。

§ 4 我々にとって一番肝心なのは最後の第四点であるが、まず、Blassを抜きにして、この表だけを見て目立つ他の三つの点から始めると、

- (1) 第二点についてはとくに言うべきことはないであろう。ヘロドトスにPが多いと聞けば、多分そうだろうと誰しも思うに違いないからであり、Blassの指摘を俟つまでもなく、アリストテレス上掲箇所すでにそういう指摘がなされていた。
- (2) 第三点について言えば、アンティボンとヘロドトスに H<sub>1</sub> が多

い（ヘロドトスに  $H_1$  が少なくないというのはむしろ意外である）主な理由はすぐ分る。それは、彼らが簡単な分詞構文（または絶対的属格）＋主節 という短い文を多く用いたからなのである。ヘロドトスでは彼の  $H_1$  総数43中17, すなわち40%が、アンティポンでは  $H_1$  総数53中24, すなわち45%がそれである。もちろん他の作家もこの種の文を書いているが、例えばトゥッキュディデスの場合だと、この種の文は彼の  $H_1$  の中でたかだか30%であって、やはりヘロドトスとアンティポンにこの種の文が多いと言える。そしてこれは、散文技術としてはむしろ素朴と言ってもよい種類のもので、アリストテレスをして「気持がよい」と言わしめた「上りのペリオドス」（我々の  $H_1$ ）の中に数えることすら気がひける。なぜならこれは「上り」には違いないが、果してこういうのをペリオドスと呼んでもいいのかどうか怪しまれるからである。つまりヘロドトスとアンティポンにこの種の文が多いということは彼らの散文が散文として成熟していたということの証拠としては弱いのである。

(3) 第一点、これは重要である。 $H_3$  が少ないという方はともかくとして、アンティポンという顕著な例外（ヘロドトスにPが多いという点も）を除けば、トゥッキュディデスと弁論家たちは  $H_2$  をこそ最も多く使っているというのは非常に意外である。しかもこれらの作家において  $H_2$  の頻度は  $H_1$  のそれをはるかに抜いて高いのである。もちろん実際の文章、演説というものは文が変化に富んでいる必要があるから、いかに  $H_1$  が理想の文型でも、そればかりで押し通すわけにも行かないだろう<sup>(15)</sup>。しかしそれにしても、アリストテレスのああいふ発言がある以上、少なくとも弁論家は  $H_1$  を多く用いるよう努力するだろうと予想していたが、この予想は見事に覆された。そして我々にとってとくに重要なのは Blass がとくにトゥッキュディデスを名指して「彼のペリオドスは主として下りのペリオドスで」と言ったことで、つまりこれは、トゥッキュディデス以外の作家のペリオドスは主として上りのペリオドスだということを匂わせる言い方だが、実際にはトゥッキュディデスなどは（叙述部では） $H_1$  の頻度が  $H_2$  の頻度とあまり変わらない方で、（アンティポンを除く）弁論家たちの家の文で

は、 $H_1$  の頻度は  $H_2$  の頻度の 4 割から 6 割ぐらいしかない。トウキュディデスでも演説となると、 $H_1$  は  $H_2$  の 4 割しかないということで、Steup が後の散文作家と言った時、誰のことを念頭に置いていたのかはやはり問題になる。一つ考えられることは、我々が上で見た弁論家の作品はすべて法廷弁論だったということで、法廷弁論というものは多かれ少なかれ口語調を帯びる（だけではないが、とにかく文を整然としないものにする要素が混じる）ものだから、ここでいわゆる 'epideictic' な演説を参照したら、また別の様子が見えて来る可能性がある、ということで、ちょうど上でリュシアス『エラステネス駁』を見たので、試みに同じリュシアスの『葬送演説』と『オリュムピアコス』（断片）合わせて 153 文を参照すると次のようになった。

表 5

	O	P	$H_1$	$H_2$	$H_3$	計
『エラステネス駁』	23 (13)	33 (18)	28 (16)	72 (40)	24 (13)	180
『葬送演説』	27 (18)	33 (22)	31 (20)	36 (23)	26 (17)	153

( ) 内は比率を示す

家の定『葬送演説』（と『オリュムピアコス』）では  $H_1$  が増えている。しかし増えたと言ってもこの程度で、要するに『エラステネス駁』で  $H_2$  に集中していたのが、『葬送演説』では各要素に分散したということに他ならない。つまりここでも、 $H_1$  は文の主流をなすに至っていないのである。もちろん、これはリュシアスだからということも言える。もっと多くの 'epideictic' な演説に当る必要があることはもとより認める。しかし今の段階でも、とくにトウキュディデスだけを取り上げて、彼のペリオドスは下りのペリオドスだから、というような言い方をすることはできない、ということまでなら言えるであろう。

§ 5 このリュシアスの『エラステネス駁』と『葬送演説』の間に見られる違いは、それでは  $H_1$  と  $H_2$  の違いは何かという問題にも通

じる。なぜ『葬送演説』では(他の諸型と共に)  $H_1$  が増えたのか。あるいは逆に、『葬送演説』では  $O$  と  $H_3$  という両極端を除けば、ほぼ平等に各文型を使っているリュシアスが、なぜ『エラトステネス駁』では  $H_2$  を40%も使っているのか。

問題は  $H_1$  と  $H_2$  とどちらがより 'formal' かというところに帰着するのだと私は思うが、そうすると、リュシアスにとって『エラトステネス駁』よりは『葬送演説』の方が 'formal' であったというのはすぐ了解できても、トゥキュディデスにとって叙述の方が演説より 'formal' だったというのは即座には了解し難いかもしれない。しかし、繰り返すが、アリストテレスは  $H_1$  を「気持がよい」と言ったのだし、「気持がよい」とはきちんと納まって整然としているということ、これはとりもなおさず 'formal' だということにもなり、かつ同時に、別の言い方をすれば、「読み易い」ということでもあるはずで、有名なトゥキュディデスの読みにくさは、主として演説に関して言われていることをここで思い出してもよいし、あるいは語学的に難解だと言われている箇所は(もちろんトゥキュディデス独特の言い回し——とくにその中でもいわゆる「表現の節約」——のが難解さの最大の原因であるが) 文型の点では主として  $H_2$  と  $H_3$  であるということを確認するのでもよい。——トゥキュディデスの文章は、演説より叙述の方が 'formal' なのである。

あるいは比喩的な言い方をして、 $H_1$  というのは、考えて、その考えを頭の中で整理して、整理した通りに書いて文としたものであるのに対して、 $H_2$  は考えながら書くのだと言ってもよい。もちろん実際に書く時もそうだとまでは言わないが、とにかく  $H_1$  では主節が万事に締めくくりをつける。そしてそれでおしまいであって、その後にかかを付け足したりはしない(それでも敢えて付け足せば  $H_3$  になる)。それに対して  $H_2$  では、まず一番肝心なことを言ってしまって、たとえば「ニキアスは言った」などと言って、それから、その時彼の周囲の様子がどうだったかとか、細かく言うかどうかという時にそう言ったのかとか、そう言いながらニキアスは胸の中でどうためらっていたかとか、ためらっていたのに何がきっかけでそういうことを言ったのかとか等々ということ、副詞節や分詞構文、絶対的統格、関係節等々というものを次々に連ねることによって追加して行く。これがトゥキ

ュディデスの  $H_2$  の代表的な型である（弁論家の場合だと、主節の後にこのように追加されるものが、これらのうちどれか一つか二つに限られて、それを繰り返すという型が多い。従って、この型が  $H_1$  として用いられると、それこそ読みながら、あるいは読む前にすでに、文の終りが見えて、アリストテレスの言った通りの文になる<sup>(16)</sup>。)

こうして、 $H_2$  というのは、文に締めくくりをつけない、「意味の終らぬ限り文もまた終らない」という点では確かに P と同じだが、 $H_2$  では、それでも文の各部分が 1 個の主節に帰属している、という点では断然 P とは違う。従って、Blass の言う「実質的には parataxis だ」というのは、半分は正しいが半分は間違っている。

§ 6 もう一つ  $H_2$  と P との違いを述べよう。ヘロドトスでは P が多いということも先に注目しておいた。そして、この P と、もう一つ O、それに前節で触れたような単純構造の  $H_1$ （分詞構文＋主節）、この三者は文章の読み易さに通じる型であるが、ヘロドトスの場合、 $O=36$ 、 $P=54$ 、単純な  $H_1=17$ 、計 107 あって、私が今回対象としたヘロドトスの文の 51 に % 当る。なるほどヘロドトスは読み易いわけである。

しかし P についてはもっと大事なこともある。それは、hypotaxis というのは、 $H_1$  にせよ  $H_2$  にせよ、一つの主節をめぐって構成された文であるのに対して、parataxis とは、いくつかの頭が para- に並んでいる文だということである。意識的な構成はそこでは必ずしも必要ではない。Hypotaxis の場合、文をそのように構成するのはもちろん筆者であるから、hypotaxis は parataxis に比べると、筆者の主観の強い文だと言える。事実を一つ見ては一つの文を記す、また事実を見てまた記す、それを重ねて行く時出来る文は O の連続、あるいは P になるはずで、その時もし、事実を見ている人間が、単に見ているだけでなく、何らかの問いかけ、働きかけをして、その問とそれに対する答（つまり事実についての筆者の自問自答の結果）を記す、その時はじめて hypotaxis が生まれる。もっとも、そういうことを言うなら、P にもすでに主観は介入していて、例えばある文と次の文をつなぐのに、*καί*「そして」を使うか *ἀλλά*「しかし」を使うかにそれが現れる、とも言えようが、そうなれば、いや、記すということ自体、純粹に客観的ではあり得ないのであって、単なる記録と称されるもので

もすでに主観が混入している、と言う人もいるわけで、本稿の論題から考えがそれて行くことになる。今は、 $H_1$  であれ、 $H_2$  であれ、 $O$  や $P$  に比べるならば、筆者によって構成された文章、それだけ主観の色濃い文だということ認めれば足りる。

そこで $P$ の多いヘロドトスよりは $H_2$ の多いトゥキュディデスの方が主観の強く出た文章だということになる。一般に、トゥキュディデスという人は客観に徹し、事実を正確に描写することに努めた歴史家だということになっていて、私もそれを否定するつもりはないが、しかし、ヘロドトスに比べれば主観の強い歴史家だということも否定し得ないことだと思う。一見矛盾するようだが、それはこういうことだと私は思っている。ヘロドトスという人は、彼の例の *historiē* によって知り得たことを一切合財、濃淡の区別もなく（よく使われている用語では「無批判に」）記す。そしてその中でどれが本当の事実らしいかの判断は読者に委ねている。これに対してトゥキュディデスは、いろいろに見える出来事から、彼自身の問いかけにより、ただ一つだけもっとも正しいと彼に思われるものを引き出し（よく使われている用語では「はじめて真に批判的な態度で歴史に接し」）てそれを記した。これがヘロドトスには $P$ が多く、トゥキュディデスには（とくに叙述部では） $H_2$  と  $H_1$  が多いことの究極的な理由だと私は思っている。

ところが、トゥキュディデスの $P$ には次に挙げる例のようなものもあって、彼の $P$ はしばしば *hypotaxis* と区別をつけにくい（もちろん *Blass* とは違う意味で）ことがある。

その例とは vi 22 で、ニキアスが不本意ながらシンリー遠征軍の指揮官に任命されてしまった時、法外など言ってもよいほどの軍備を要求したらアテナイ人も思い止どまってくれないかと望を託して演説をする、その一節である。



①～⑥はすべて *καί* または *τε* を以て対等に並べられているから、全体の構造は典型的な P だと思われる。ところが、よく眺めれば分かるように、実は①②は主節中の不定法 *ἄγειν* の目的語だが、③④は *χρηναί* の目的語である。①②は純然たる名詞句であるのに対して、③④にはそれぞれ colon 末尾に不定法があって、これらの不定法は *ἄγειν* と対等と考える他なく、従って *ἄγειν* ではなく *χρηναί* にかかるのである。さらに、⑤⑥は主節の *ἄγειν* の目的語ととってとれないことはないがそれは無理で、それよりは④の末尾の不定法 *ἄγειν* の目的語ととるべきであろう。そうなると、①～⑥のすべてがそれぞれ  $H_2$  であるばかりでなく、①②と③④⑤⑥がそれぞれ一つの大きな  $H_2$  をなしている、もっと正確に言うと、①～⑥のすべてが *μοι δοκεῖ*… という主節に奉仕していることになる。となると、これは P であるよりは  $H_2$  に分類した方がよいのかもしれないのだが、私としては、散々迷った果てに P とした。なぜなら、この文をこうして読むのではなく、演説として聞いたら、上に述べたような、どの不定法がどこにかかって… などということはまず意識されず（とくに、上で述べたように、主節が①の中に埋没して目立たなくされているのでなおさらのこと）それよりは文中にむやみにと言いたいほどのべつ出て来る対格名詞と *καί* が耳に響くだろうと思ったからである。そして、正にそれこそが、この場面でニキアス（あるいはそれを記したトゥキュディデス）が狙った効果だろう。次々に *καί*…*καί*… と言っては、「…も持って行かなければならない、…も持って行かなければならない、それから…」と、いつ終るとも知れず列挙しているわけで、しかもその一つ一つについて、なぜ持って行かなければならないか、その理由や目的まで述べ、述べ終るとまた *καί* とやるというわけで、まともな耳でこの演説を聞いたらいらいらしたはずである。ところがアテナイの民衆がそれとは反対に、ニキアスの要求をあっさり認めてしまったのは狂っていたとしか言いようがない。

このようにトゥキュディデスは、部分部分は  $H_2$  だが、全体の構成は P だという構文を所々で使っていて、これらは無論、それぞれにその P が醸し出す効果を狙っているのである<sup>(17)</sup>。したがって、Steup や Blass の言うように、トゥキュディデスという人がギリシアの散文技術の発達の中程に生を享けたから、彼の文章は hypotaxis と parataxis が奇妙に混じり合っているのだというようには言えないというのが私の意見である<sup>(18)</sup>。

## 註

- (1) これをわざわざ「もちろん」と言ったのは、アリストテレスが同じ箇所へヘロドトスを古い文の型の例として挙げているのがあまりにも有名だからである。このアリストテレスの考え方はおかしいということをはっきり述べているのは、私の知っている限りでは Dietram Müller, *Satzbau, Satzgliederung und Satzverbindung in der Prosa Herodots* (Meisenheim am Glan 1980), 6 だけである。
- (2) この「後の散文作家」について Steup は何の特定もしていないが、後に述べるように (17頁参照) これは問題になり得る。
- (3) Steup による Classen の改訂版がでたのは1919年 (原稿はもっと早く出来ていたが、第一次世界大戦のために出版できなかったらしい) で、もう半世紀以上も前のものである。これほど古い説を今さら問題にするのは、これ以後トッキュディデスについて多くの優れた研究成果が発表されているにもかかわらず、文体については、比較的なおざりにされていて、Steup は今なお基礎的研究としての価値を失っていないからである。
- (4) J. D. Dennison, *The Greek Particles*, 2nd. ed. (Oxford 1958), p. 69 参照。Dennison はとくに *καὶ γάρ* という句の場合を取り上げて、この *καὶ* の後に 'a bracket (or comma)' を入れるか入れないかは、punctuation を論理によって行うか息継ぎ箇所で行うかの問題だと言っている。
- (5) 参考までに言うと、トッキュディデスの叙述部の 63 行につき 1 とは 2 頁弱に 1 回に当る。
- (6) *Γάρ* を含まない括弧付き挿入文のほとんどには *ὅτι* が使われている。つまり、挿入文の大部分は理由や事情の説明のために使われ、そうでないものは主に、但し書きを挿入するために使われているわけである。
- (7) Denniston, op. cit., p. vi, xxx ix, 1 xxiv など参照。結局小辞 (particles) というものが意味以上に気持、あるいは感情を表す、そのために文が 'formal' になればなるほど使用頻度が低くなるのであろう。
- (8) トッキュディデスの叙述部の 395 行につき 1 は 14 頁半に 1 回、ヘロドトスの叙述部の 193 行につき 1 は 7 頁に 1 回の割になる。
- (9) 韻律以外の点で目立つことが一つある。ホロメスや悲劇の先行の *γάρ* の約 8 割がたは疑問文、命令文、あるいは「…しようではないか」という勸奨文、あるいは「…するぞ」とか「…しないぞ」とか話し手の決意を表す文の中で使われている。ヘロドトスではこれはそれほど顕著ではない。
- (10) ここには通常の (先行のではない) *γάρ* を含む括弧付き挿入文が入る。—「人間は目ほどには耳を信じないものだからな。」
- (11) これと似た例は iii 56. 2 にもある。
- (12) この parataxis に等しいという自信に満ちた断言の根拠になったのもやはりアリストテレス『弁論術』3. 9. であろう。そこで彼は、*eiromenē lexis* について、意味が終らない限り文も終らない、だから読んでいても先が見えない。しかし、ゴールがどこにあるか分らないで競争する気になるだろうか、などと言っている。
- (13) はじめはそれぞれの作家について 100 個の文を調べればよいつもりでいたのだが、調べる対象を 100 から 200 に増やして行く過程でデータの内容が変動する、つまり 100 ではデータが安定しないことを知って、少なくとも 150、なるべく 200 前後にまで対

象を拡げることにした。

- (14) 不定法句，分詞句のような，意味の上で主語・述語を持っている句も従属節と見なす。
- (15) 私自身調べたわけではないが，例えばキケロなどは，デモステネスに比べるとこの点（つまり文型という点）では，比較的变化に乏しく， $H_3$ が多いのではないかと想像している。
- (16) こういう文に出会うと，歯切れも良いし調子も良いし，見事だとも美しいとも思うが，乱用されると言うまでもなく嫌味になる。
- (17) 部分部分は  $H_2$  だが全体は P だという例は他にもいくつかあるが，vi 47 などはその代表的な例であろう。ここでもまた主人公はニキアスで，「ニキアスの考えは…というのであった」(*Nικίου μὲν ἦν γνώμη*) という一つの主節に五つの，それぞれ従属節や分詞構文を伴った不定法句が従っている。ニキアスはここで，彼の甚だ消極的な計画を簡条書風に語っているのである。
- (18) 本稿ではとくに  $H_3$  については触れなかったが，トゥキディデスがこれを用いたのは，主として彼が一つの行為（あるいは出来事）と認めたことを一つの文で言い表そうとする場合であったと私は思っている。例えば vi 6. 2. に 93 語から成る長い文があるが，「エゲスタ人がアテナイに軍艦を派遣してくれと要請した」という主節をめぐっているいろいろなものが付着しているのは，すべてその「エゲスタ人が要求した」という一つのことにまつわるさまざまな事情について言っているのである。なお拙稿「ツキジデスにおける分詞構文」(『文藝言語研究』(言語篇) 7, 19を参照。